

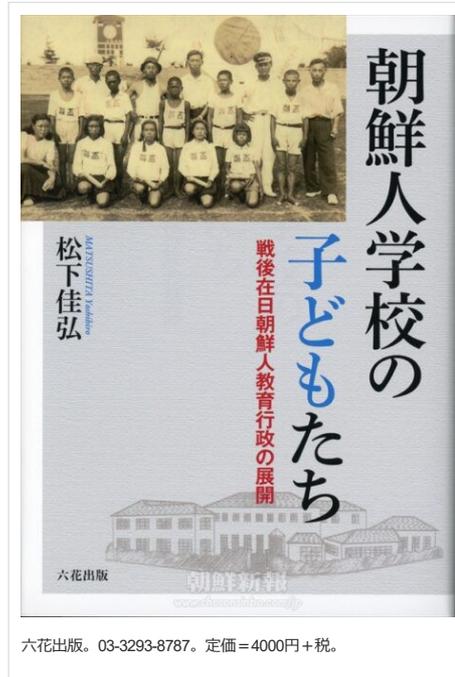


## 〈本の紹介〉 朝鮮人学校の子どもたち—戦後在日朝鮮人教育行政の展開— / 松下佳弘 著

2021.01.29 (11:51)

民族教育 印刷

行政史から探る「自主性」



六花出版。03-3293-8787。定価 = 4000円 + 税。

民族教育の草創期における朝鮮学校に対する日本政府の度重なる弾圧、それに抗う先代たちの闘いの歴史についてはあらゆる研究がなされ、数多くの書物に記録されてきた。

本書は、1945年から約10年間の「在日朝鮮人教育」を規定した行政の展開過程とその特質を、占領軍、日本政府、地方自治体など行政主体の認識や動向に即して考察したものだ。

本書では、▼日本政府が在日朝鮮人の教育施設を規制し、最終的には閉鎖するにいたる過程と当時の政策および行政の実態、▼教育施設閉鎖により、日本政府が児童・生徒の公立学校への「収容」を命じた過程および閉鎖措置後の行政の模様と地方の動向を検討・解明しようと試みた。2部構成、全8章にまとめられている。

第1部では主に占領軍と日本政府すなわち中央の行政主体の認識や行政措置を分析し、地方行政の動向を京都府の事例を中心に論じた。第2部では地方ごと8都府県の事例により章を構成した。政府の指示文書、報告文書、執行記録、各種会議録はもちろんのこと、これまで極秘扱いで存在が知られていなかった政府機関による通達類、公立学校への転校をめぐる交渉記録などを朝鮮人側の資料とも照合しながら、詳細に分析が加えられている。

終章で著者は次のように述べている。

「公教育の含意は広いが、ここで公教育を公費による教育と操作的に定義するなら、公立朝鮮人学校、分校、学級などの成立とその継続は、公教育において、朝鮮人の『自主性』を促進する教育がなされた実例であり、それ自体が重要な意味をもつ。なぜなら、公教育において、在日朝鮮人のみならず、地域に居住するさまざまな出自の人々の『自主性』を促進するような教育への道を開く可能性につながるものだからである」

著者は長年にわたり京都市の小学校教員として勤めるなかで、日本の学校に通う数多くの在日朝鮮人児童たちと接してきたという。定年退職後には京都大学大学院に入学し、「公立学校にどうしてこんなに多くの在日コリアンがいるのだろう」と現役時代に抱いた問題意識から在日朝鮮人教育の歴史について研究してきた。

約10年をかけて完成させた博士論文をもとに刊行された本書からは、意匠の凝らされた一文一文しかり、教育の在り方を模索し展望する著者の限りない志を感じられる。

(李鳳仁)

0



Like 0

Tweet

LINEで送る